

昭和を振り返る ～「昭和100年」を迎えて～
和田 進 (P-194426・東京)

本年は「昭和100年」を迎える記念すべき年であることから、激動の昭和を1フレーム16リーフで簡略に振り返ってみることとした。作品1段目には、非郵便史料ではあるが昭和天皇の御署名と天皇の印章(「御名」と「御璽」)がある辞令書に加えて即位の様子を伝える葉書を示し、続く2段目には戦争の時代を、3段目には戦後の混乱の時代を、そして4段目には復興と発展の時代を象徴する史資料を展示している。

限られた頁数ゆえに駆け足な展開となってしまうが、本作品が「昭和」を迫体験する一助となれば幸いだ。

昭和を振り返る
～「昭和100年」を迎えて～

和田 進

はじめに

令和7(2025)年は、昭和元(1926)年から数えて「昭和100年」となる記念の年である。本稿ではこれを祝い、郵便史料等を主として昭和の歩みを振り返ることとした。

0-1. 昭和天皇

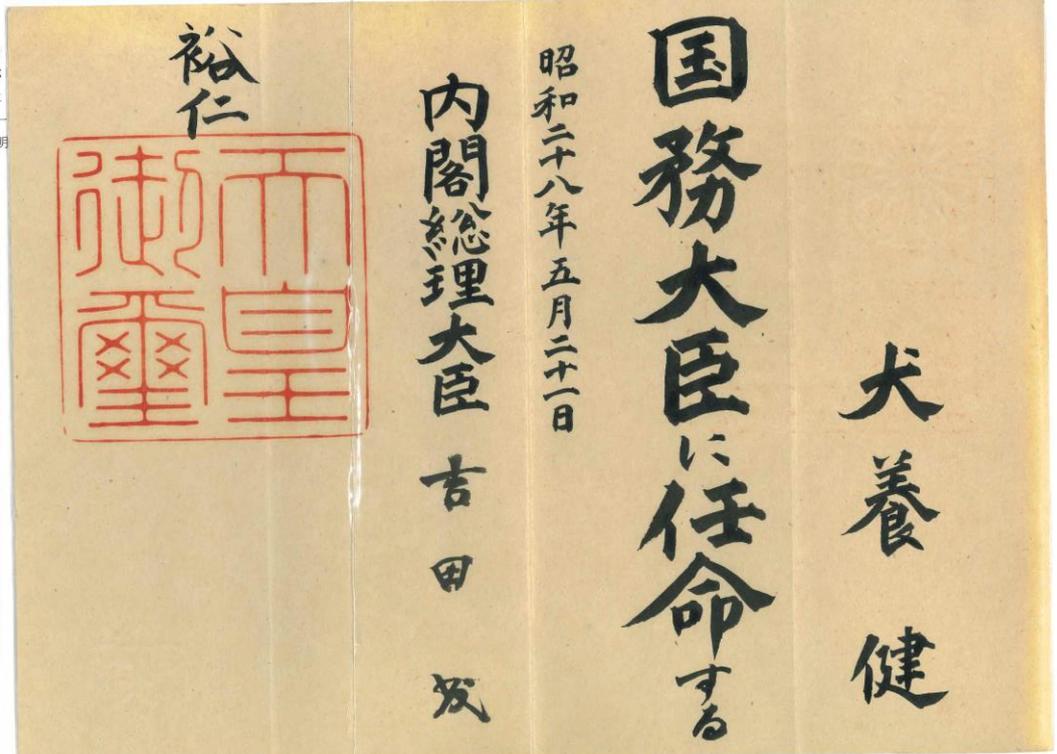
昭和という時代は、第124代目の天皇の御即位によって始まった。御称号は迪宮、我々が一般に御名と呼ぶ諱は裕仁であり、明治34年に当時の皇太子嘉仁親王殿下、後の大正天皇の第一皇子として誕生し、内外に皇太子であることを宣明する立太子礼が大正5年に行われている。



消印：福井5.11.3

切手：儀式の冠

葉書：大尉の大礼服を身に着けた
15歳当時の裕仁親王殿下



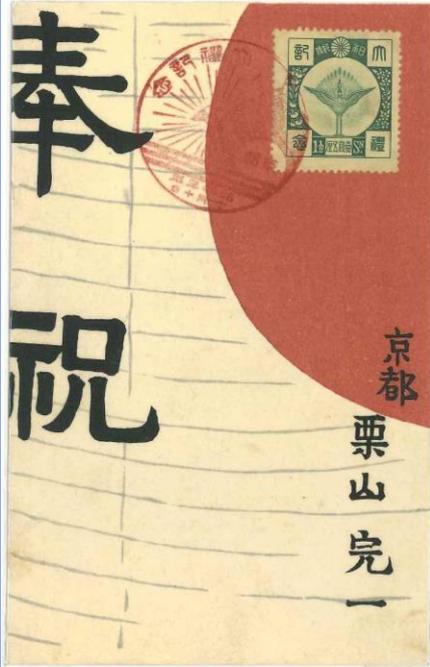
0-2. 昭和天皇

国の法令のほか、高位の勲章の証書や高官の辞令書等には現在でも御名御璽、すなわち天皇陛下の親筆や「天皇御璽」の印がある場合があるが、下に示したのは昭和天皇の諱である「裕仁」の直筆御署名と御璽が見える大臣任命状である。本辞令書は、御名御璽の右横に直筆の副署がある吉田茂の第5次内閣において法務大臣となった犬養健に宛てたものだが、同人は犬養毅元首相の三男であり、造船疑獄で指揮権を発動し司法への介入を行ったことでも知られている。

1-2. 昭和を寿ぐ

本頁の2葉は、どちらも市井の人々が差出した、「昭和」への御代替わりを記念する葉書である。左は「奉祝」と書かれた日の丸の提灯をアップで描いたモダンなデザインの葉書だが、大札記念切手に京都の特印も押されていてマキシマムカード様になっており、郵趣家の差立てだろうか。表面を見ると「切手裏面」とも書かれており、この頃には既に国内郵便物に対する切手裏面貼付の運用が行われていたことも分かる。

また、右葉書の絵は、左頁下に示した葉書裏面画像の下段にも見える紫宸殿前の様子を描いたものであるが、文面を読むとどうやら儀式会場は令和の御代替わりの時と同様に、儀式後の一定期間は一般見学も可能だったようだ。



今上陛下御一代之盛儀たる御大禮も御威稜を内外に宣揚し御聖徳乾坤に洽く國を挙げて萬歳を頌へまつりし戊辰は行きて昭和維新の己巳將に來らむとす
 国恩新らたなる春を迎へむとして先づ閣下の御健康を祈り伏而年末の御祝辭を捧ぐ
 何卒相変らせられず御眷顧を賜はらむことを
 尚十二月一日より翌年三月末日まで御式場拝観を御許し相成りしこと千載一遇の好機逸すべからず冀くは賑々數御入浴御待ち申上げます

(左)
 切手：昭和の大札記念
 消印：京都 3. 1. 1. 10
 (右)
 切手：田沢 1 銭 5 厘
 消印：京都 3. 1. 2. 22

